

日韓神学シンポジウム2014 「いのちの尊厳の確立」セッション I 報告（主催：聖学院大学 第4回日韓神学者学術会議）

著者	田村 綾子
雑誌名	聖学院大学総合研究所Newsletter
巻	Vol.24
号	No.2
ページ	24-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1477/00002767/

Title	日韓神学シンポジウム 2014 「いのちの尊厳の確立」セッション I 報告 (主催：聖学院大学 第4回日韓神学者学術会議)
Author(s)	田村，綾子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.2, 2015.1 :24-25
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=5244
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

主催：聖学院大学 第4回日韓神学者学術会議 日韓神学シンポジウム 2014 「いのちの尊厳の確立」セッションⅠ 報告

2014年11月7日（金）、聖学院大学と韓国長老会神学大学校による第4回日韓神学者学術会議の「日韓神学シンポジウム2014」が聖学院大学主催にて行われた。聖学院大学と韓国長老会神学大学校は、2008年9月に以後交流することを決めて協定を締結、今回の組織神学研究をはじめ、過去には日韓教会交流史研究や日韓現代史研究などの共同研究を行ってきた。

玄曜翰（ヒョン・ヨハン）韓国長老会神学大学行教授の奨励による全学礼拝に続き「いのちの尊厳の確立」を主題にしたシンポジウムは、満員の聖学院大学ヴェリタス館教授会室で行われた。開会挨拶で姜尚中学長は、東日本大震災とまだ記憶に新しい韓国セウォル号事件の共時性に触れ、いのちの尊厳はあるのか？と問いかけられ、尊厳とは、一人の人間が大切であるという感覚（Sense of self importance）を持つことであるとし、それがもたらされるためには悲しむことができる、苦しむこと、悩むことができるという霊的なものの存在に触れられた。

セッションⅠでは、菊地 順大学チャブレンの司会、鄭鎬碩特任講師の通訳により、窪寺俊之教授の講演「傷付いた魂へのスピリチュアルケア」と尹哲昊（ユン・チョルホ）長老会神学大学校教授によるコメントに加え、参加者も交えた活発な討議がなされた。

1. 講演要旨

まず、魂の傷つきは旧約の時代から存在したことを、神の癒しを求める民に「神様が共にあり救ってください」と告げた預言者エレミヤによる宗教的ケアを引いて述べられた。近代科学の発達後は、シシリー・ソンドース医師のホスピス開設と「スピリチュアルペイン」への関心、死に直面した患者の「神様との取引」というスピリチュアルニー

ズに関するキューブラー・ロスの指摘、そしてWHOによる「健康の定義」の検討という3つの出来事をもとに、人々が深く傷つき自己を見失った時、宗教家が立てられたり宗教を持たない者も超越的存在に助けを求めたりすると指摘された。さらに、東日本大震災においては、多くの喪失を体験した人々に、様々な宗教家が宗派を超えて宗教家にしかできない仕方死、葬い、死後の問題にかかわるケアを行ったことを紹介し、この世とあの世の執り継ぎをする宗教家の働きが大きさが再認識されたことを示された。そして、自然災害は人の暮らしの価値基盤を揺るがし、その中で人が生得的に持つスピリチュアリティ—超越者との関係形成能力としての生命維持機能—が覚醒する。これはすべての宗教を包み込むスピリチュアルな世界への希求であり、スピリチュアルケアとは、傷ついた魂に生きる力や希望を与える超越者との関係を支えるケアであって、宗教的ケアや心理的ケアと非常に接近した概念であるものの、宗派が持つ教理にケアの資源を求めるものとは異なると述べられた。

次に聖書にみる3つのスピリチュアルな世界としてイエス・キリストによる律法の束縛からの解放と神様の愛への導き、いのちの根源である創造の神様との関係の強調、すべての違いを認め特に社会の底辺で苦しむ人や病を負い差別された人々の元に出向き共に生きる姿を挙げ、人々を束縛から解放し真に生かすこれらの働きはイエス・キリストによるスピリチュアルケアであるとされた。

さらにスピリチュアルケアによる癒しは、治療や自己回復のみでなく、過去の苦しみや悲しみにも新しい価値を見出す和解と再生の可能性があるとして述べられ、より広い世界観に立って平和を創り出す可能性にも言及された。このようなスピリチュアルケアの担い手は自己正当化することなく、傷

ついた人々を主役とし自らをサーバント (servant) として理解する。そこには神様に生かされている自分への気づきが不可欠であり、静まって神様の声を聞き内なる自己を深めて謙遜にさせられることによって、忍耐と愛と希望をもって弱い人や傷ついた人に仕えることができると説かれた。

最後に、スピリチュアルな思考は、民族や宗教の違いを互いの壁とせず、尊敬し学び合う機会をもたらし、すべての人が生きることのできる新しい世界を創造する原点になると結ばれた。

2. 尹先生のコメントと質疑応答

尹先生は窪寺先生の論旨に賛同を示された上で、主としてキリスト教のスピリチュアリティについて聖書箇所を複数引用しながら、キリスト者に求められる自己犠牲的な共感的愛 (self-sacrificing emphatic love) が人間と世を癒し救う。霊的癒しとは神との関係回復による人間の全存在 (霊・魂と体) の癒しであり、それは聖霊からもたらされると述べられた。人間が神の霊をもって形づくられた霊的存在であることは、他の被造物と異なる神との人格的、対話的關係の中に存在するものであるという前提に立たれたものである。窪寺先生は応答して、スピリチュアリティの2つの意味すなわち特殊性と普遍性のうち、尹先生は特殊性に依拠されていると述べたうえで、普遍性をも持つことで他を排除せず一致点を見出せることや、全ての宗教を包含する神秘的な世界の理解も強調された。

この点に関して最後に総括発言された阿久戸光晴聖学院理事長・院長は、お二人の観点はクリスチャン人口1%の日本と、形成的伝道の国である韓国との差がもたらすものであろうと述べられた上で、しかし深いところで合致していると思えるコメントされた。

フロアからの霊的癒しと人間における神の似姿との関係に関する質問に対して尹先生は、その理解の仕方は多様であり例えば西洋では人間の内な

る理性に神の姿を見る一方、現代神学では人間の内面における神の姿を人格としては考えず、他の動物と区別した魂を持つ人間という捉え方はしないと説き、人間の中にある神の姿とは、神との関係を形成できる能力のことであり、霊的癒しの行きつくところは神との関係回復であると述べられた。これは、窪寺先生が、スピリチュアリティを人間が生得的に持つ超越者との関係形成能力としての生命維持機能であると定義したこととも合致しているといえる。

また、特定の宗教に勧誘しないことで、傷ついた人の求めを見逃す懸念も投げかけられた。これに対して窪寺先生は、傷ついた人の物語を徹底して傾聴し、最も深いところにあるニーズに気づき、そこに寄り添い、信頼が生まれたところで問われたらこちらの証しを語る、というスピリチュアルケアのプロセスを示す形で応答された。

質疑の数々は紙幅の関係から省略するが、日韓のキリスト者による傷ついた魂の癒しに関する討議は、神様と人間との関係を聖書的な理解に立って解き明かそうとするものであり、神様から与りたいのち一つひとつをかけがえないものとして尊重しその存在を肯定することの意義を再確認させてくれた点で、スピリチュアルケアにおける宗教の意義を再考するに相応しい充実した内容であった。



左下:姜尚中学長 (挨拶)、右下:窪寺俊之教授 (講演者)

(文責: 田村綾子 [たむら・あやこ] 聖学院大学人間福祉学部人間福祉学科准教授)